

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012 年 10 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	池 田 光 子	（中国哲学）
-------------	---------	--------

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	台湾における日本文化研究の現状について—日本漢学を中心に—
-------	-------------------------------

派遣期間

2012 年 7 月 29 日 ～ 2012 年 9 月 26 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	台湾	台北	中央研究院、台湾大学	
	同上	彰化県	明道大学	
	同上	高雄市	高雄餐旅大学	
	同上	新北市	淡江大学	

派遣先で実施した研究内容

1. 学会参加（研究発表）

- ①東西方哲學中的「情」與「Emotion」國際學術研討會（2012 年 8 月 24 日，國立台灣大學水源校区哲學系館 301 會議室）
 - ②東亞漢學研究者之會 Han Learning Scholar's Society of East Asia（2012 年 9 月 22 日，台灣明道大学圖書館）
- ①は、台湾大学と高麗大学（韓国）とが共同で行った国際学会。渡航直前に学会参加の許可を受けたため、現地にて関連資料の調査および、論考作成・発表準備（中国語）を行った。②は、台湾現地の中国哲学・文学、および日本漢学・日本思想研究の若手研究者達を中心となって行われた学会である。現地にて関連資料の調査を行い、発表（日本語）を行った。

2. 現地研究者との情報交換

中央研究院中国文哲研究所の張文朝助研究員のご助力を得て、経学文献研究室の林慶彰研究員を始めに、同研究室に所属する全研究員の方々と意見交換を交わす場を得ることができ、台湾における日本漢学研究の状況・日本における中国哲学研究に対する見解等、近世期から現在に至るまでの日本漢学に関する多くの教示を得た。また、同所における他の研究室（古典文学研究室・比較哲学研究室）の研究員の方々とも、張研究員よりご紹介を頂き、各専門分野における視点から見た、日本漢学研究について、意見を頂くことができた。なお、中央研究院だけではなく、淡江大学の田世民助理教授および高雄餐旅大学の前川正名助理教授より、日本漢学だけではなく、台湾における日本文化研究の状況について教示を得ることができた。

また、前述 1. では、高麗大学の李承煥教授や台湾大学の佐藤将之教授より、貴重な指摘・意見を頂くことができたほか、韓国における日本漢学研究の状況について、その一端を教示して頂いた。ほか、

現地で活動したことにより、予定していなかった多くの研究者・学生と学術的交流を得ることができ、台湾における日本漢学研究への状況の一端を垣間見ることができた。

3. 日本文化および日本漢学研究に関する資料調査

中央研究院を足場とし、日本漢学研究関連書籍の調査を行った。但し、1. で述べた学会参加との兼ね合いもあり、調査作業は当初の予定にまで達することはできなかった。そこで、訪問先所蔵機関のうち、中央研究院にのみ焦点を絞り、所蔵目録・データベースを用いた調査を行った。

また、近年発行されている日本漢学関連の研究書を現地の書店を巡ることでチェックまたは購入し、昨今の台湾における研究状況の一部を把握した。一例としては、「日本漢学叢刊」・「日本学研究叢書」等、日本漢学を含む研究叢書が発刊されていることが判明した。なお、現時点では、上述のシリーズは大阪大学附属図書館には所蔵されていない。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

【当初の目的】

本研究の当初の目的は大きく分けると、Ⅰ. 台湾における日本漢学研究状況について、Ⅱ. 台湾での日本漢学研究の手法について、の二点であった。

これらの目的を達成するため、予定していた作業は、(1) 台湾における日本漢学関係学会への参加、(2) 日本漢学関連研究書籍・論考の調査、である。これらの作業を通じて得られた成果および達成状況は、次のとおりである。

【達成状況・成果等】

Ⅰ・Ⅱ双方に共通する成果を得られたのが、【研究内容】1. に挙げた学会参加と2. の情報交換とである。1. については、自身の発表を基にした質疑応答が中心となってくるが、そこで得た意見から、海外における日本漢学研究の視点を知らうることができた。2. では、現在台湾の第一線で活躍している日本漢学研究者を教示して頂くことで、【研究内容】3. の資料調査を行う上で、有益な情報を得ることができた。併せて、ここ十数年来の台湾における日本漢学研究の状況についても、各人の見解を聞くことができた。これらの教示を基にした調査から、Ⅰ・Ⅱについて、次のことが明らかになった。

Ⅰ. 十年ほど前と比較すると、現在の日本漢学研究は、各研究機関とも落ち着いた様相を呈している。しかし、土台作りは着実に進んでいる。たとえば、台湾大学では日本語で書かれた日本漢学・日本文化に関する叢書が近年続々と出版されている。また、著名な日本思想研究者を、日本より教授として迎えるなどし、日本漢学が学べる場を構築している。

Ⅱ. 日本漢学の研究は、中国哲学・比較哲学・東アジア古典文学といった、様々な分野の研究者によって着手されている。そのため、個人研究はもちろんであるが、複数の分野の研究者が集まって一つのグループを作り、研究を行うことがある。また、研究の視点として、漢字文化圏における日本漢学の位置づけという視座が強い。例えば、儒家思想が文化に与えた影響の差異、各国儒者の受容状況や展開等、思想的特徴の比較検討等、日本に限定しない広い視点で日本漢学研究が進められている。

なお、日本漢学に関する著作・論考であるが、近年の物について、日本語の本は殆ど入ってきていない。著名なものについては、中国語に翻訳されているが、ごく一部のみである。昨今、これらの研究書を中国語に翻訳して出版する動きもあるとの話を、今回の情報交換の場で入手することができたが、継続的な計画ではないらしい。

このことから、日本漢学とは言え、「儒教」というテーマを含んでいることから、積極的に海外での発表が、日本の研究者に期待されていることが窺えた。また、このことを承け、今回の派遣期間内に交流を得た研究者に対し、逆に日本での研究発表も行うことを視野に入れて欲しい旨を伝えた。これらのことを行うことで今後の相互的な研究推進関係を築くための、足掛かりを得ることができた。

派遣後の研究発表の予定

【研究内容】 1. で記したとおり、既に以下の①・②の論題で発表を行っている。

① 關於中井履軒從「性」到「徳」的歷程

② 中井履軒『論語逢原』の「知者」解釈に見られる元学の影響

①については、口頭発表だけではなく、予稿集に論考を発表している（双方とも中国語）。しかし、指摘を受けた箇所を始めとして加筆訂正を行い、国際雑誌に投稿する予定である。②はレジュメを用いた口頭発表（日本語）のみであるため、学会で得られた成果を踏まえ、論考として整え次第、紙面発表する予定である。

資料調査については、発表の段階まで到らない程度の成果しか得られなかったが、今後、継続的に調査を進めるために必要と思われるツールおよび人脈を得ることができた。よって、これらについても、一定の成果を得た段階で、発表していくことを考えている。

今回の調査で得られた知見は、予定よりも膨大な量であった。一度期に全てを自身の研究に活かすことは困難であるが、具体的な指摘を受けた箇所を中心に研究を見返しつつ進めていくことで、新たな近世期日本漢学研究の視点を築いていきたい。